

## イスラーム・ジェンダー学科研 2020 年度『巣ごもり上映会』

イベント名：「Dalya's Other Country」

日 時：2021 年 1 月 30 日（土）14:00-17:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

登壇者：高橋圭氏（東洋大学）、森千香子氏（同志社大学）

司 会：木原悠氏（お茶の水女子大学大学院）

\* \* \* \* \*

木原：これより、巣ごもり上映会「Dalya's Other Country」を開始いたします。本イベントは、イスラーム・ジェンダー学科研ならびにグローバル関係学科研、そして中東映画研究会の共催となっています。本日の司会はお茶の水女子大学大学院の木原悠が務めさせていただきます。

それでは早速ですが、本作品の趣旨説明と映画紹介を、東洋大学の高橋圭さんにお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

\* \* \* \* \*

高橋：宜しくお願ひいたします。本日ご紹介する映画は、昨日の映画とある種のセットという形の、二日連続の映画となっております。昨日ご参加された方には繰り返しとなります、最初に主催の背景を簡単に説明しますと、ポスターの「主催」の欄にイスラーム・ジェンダー学科研・グローバル関係学・中東映画研究会と 3 つほど挙がっておりますが、私は特にイスラーム・ジェンダー学科研のメンバーとしてこの上映会を企画させていただきました。前回の参加者の方には繰り返しとなります、イスラーム・ジェンダー学科研の大きなテーマは「共生」でして、いわゆる「ムスリム」と「そうでない人々」との「共生」を基本としつつ、それ以外の様々な、特に軋轢の高まっている現代世界における様々な共生の問題を考えることが大きなテーマとなっています。その中で、昨日の上映会を企画していただいた森さんと私とで、特に欧米におけるマイノリティのムスリムを対象とした研究班をイスラーム・ジェンダー学科研の中で運営・主催している立場です。従って、それに関する映画として、昨日はフランス、今日はアメリカという形で企画することとなっております。なお、本日の映画のテーマ・内容・方向性は昨日の映画とはかなり異なるものとなっております。詳しくは後述しますが、単純に申し上げると、アメリカで抑圧されるムスリムの話に関する映画ではありません。その点について、最初にご理解いただければと思います。

では最初に、映画の内容に関して説明をしたいと思います。今回紹介する『Dalya's Other Country』は 2017 年に発表されたドキュメンタリーで、2012 年にシリアの内戦を逃れてシリアのアレッポからアメリカはカリフォルニアのロサンゼルスに移住したシリア人一家の姿を追った映画となっています。この作品は、一家の娘の Dalya の家庭生活及び高校生活を中心に描いており、2013 年から、彼女が高校を卒業する 2016 年にかけての時期を扱っています。特に、難しい話が出てくるわけでございませんので、理解が難しいことはないかと思いますが、せっかくですので、ネタバレのない範囲で、映画の内容について補足説明をしておきたいと思います。

まず、どういう家族なのかを紹介したいと思います。この映画に登場するのは Dalya の一家ですが、主

主人公にあたるのが、Dalya さんで、基本的には、彼女の成長がこの映画のテーマとなっております。彼女は高校生で、彼女の高校卒業までの姿を追っていきます。次に、Rudayna さんとして、彼女は Dalya の母親です。彼女はシリアでは専業主婦をしていましたが、アメリカへ移住して生活が大きく一変することになります。次に、Dalya の兄の Mustafa はアメリカの大学を卒業しており、映画製作として働いています。彼が映画製作者ということがミソなのですが、それについては後ほど説明します。最後は、父親の Mohamad Hassan です。少しネタバレになりますが、彼は元々アレッポでオリーブの輸出業に携わっていた会社経営者ですが、実は彼は家族と一緒に暮らしていません。なお、その理由については、映画の中で明かれるこことなっています。また、父親の会話からは、もう一人息子がいるかと思われるのですが、本作には登場しないので、その点については考えなくてもよろしいかと思います。

本映画を観るにあたってのもう一つのポイントとして、シリア難民はシリアから戦争を逃れてアメリカへ来たのですが、「シリア難民」というと、どうしても日本のマスコミのイメージですと、着の身着のままで避難して外国で困窮を極める人々というイメージがあるかもしれません。しかし、この点については説明が必要となります。これもネタバレになりますが、実は、Dalya の母の Rudayna と、彼女の夫の Mohamad Hassan は 20 年前に 10 年間アメリカで暮らしていました。また、アメリカの市民権も所持しています。Mustafa は恐らくその時にアメリカで生まれた人物なので、Dalya を含めて、この家族はアメリカの市民権を持つことから、定義上は「難民」ではありません。この点については、Rudayna 自身も指摘しています。また、Mustafa について、先ほど彼はアメリカの大学を卒業していると述べましたが、彼は内戦の前から既に大学進学のためにアメリカに来て暮らしていて、そのまま卒業後もアメリカで暮らしています。よって、いわばそこに Dalya と Rudayna が合流した形と言えます。それから、彼らは経済的に裕福であることが映画からすぐに読み取ることができます。家族の居住地は、正確な場所は不明ですが、恐らくロサンゼルス北部のパサデナと呼ばれる地域の近くではないかと思われます。このパサデナは高級住宅地で、街の様子を見ても、いわゆる閑静な住宅街で、物価の高いロサンゼルスではそれなりの経済力がないと暮らせない地域と思われます。つまり、その点でこの映画はいわゆるアメリカで困窮する難民の姿を描いたものではなく、むしろ、アメリカで中流層の暮らしをおくるアメリカのムスリムの姿を描いた映画であるため、そういうものとして観た方が違和感はないかと思われます。無論、故郷を追われて見知らぬ外国で暮らす大変さも描かれるのですが、それだけが映画の焦点ではありません。むしろ、ある意味では平穏で豊かな暮らしをおくる家族の日常の中で、Dalya たちが経験する葛藤や苦悩などが描かれている作品となっております。

映画の大まかな説明はこのぐらいにして、最後に、監督と映画製作の背景の説明をしたいと思います。私は監督とは全く面識がないのですが、彼女のインタビューの記事や動画を幾つか拝見しまして、それを基にどういった背景で製作されたかを説明したいと思います。監督のジュリア・メルツァーは、ドキュメンタリー映画を手掛ける映画製作です。実は、本作を製作する前に、彼女はダマスカスの女子クルアーン学校をテーマとしたドキュメンタリー映画を製作していて、そのために 2005 年から 2006 年にかけてダマスカスに長期滞在していた経験があります。その後も、撮影のためにシリアを何度も訪問しているので、シリアとの縁が深い方でした。しかし、その後シリアで内戦が勃発したこともあり、彼女は次のテーマとして、内戦を逃れてアメリカにやって来たシリア人についてのドキュメンタリー映画の製作を計画しました。なお、どうやってアメリカで暮らすシリア人の家族に接触したかですが、実は、彼女がダマスカスの女子クルアーン学校のドキュメンタリー映画を製作した際に一緒に働いていた人物が Dalya の兄で映画製作者の

Mustafa でした。そこで、Mustafa の家族がアメリカへやって来た時から、彼女は彼の家族と交流を深めていき、本作の製作に至ったということです。従って、本作には Mustafa も登場しますが、彼も共同制作者として本作の製作に携わっています。ちなみに、昨日の映画は監督本人が自身をテーマに製作した映画でしたが、本作は、ムスリムでない人がムスリムを描くという形式となっております。とは言え、本作は Dalya の家族も映画に主体的に関わっている側面があると捉えることもできます。映画の説明は以上となります。それでは、実際に映画を観て頂きたいと思います。

\* \* \* \* \*

### 『Dalya's Other Country』 上映75分間

\* \* \* \* \*

木原：それではこれより、質疑応答の時間に移ります。

質問者 1：今回の映画はほのぼのとした内容でしたが、アメリカのイスラーム教についてお詳しい高橋さんにお伺いしたいのは、9.11 及びシリア問題という 2 つの大きな波が例えれば世界にあると考えたときに、9.11 の後にアメリカの中で、ムスリムであろうとなかろうと、イスラーム研究者の間で議論がものすごく盛んに行われ、どうあるべきか、どう考えるべきかといった議論があったと思います。そこでかなり議論が成熟した段階にあったなと思ったところで、2010 年代の ISIS の問題なんかが出てきたのではないかと思います。今回の映画は、たまたま 2014、2015、2016 年あたりの映画であり、高橋さんはちょうど 2016 年にアメリカにいらっしゃったと思いますが、ISIS の問題などが入ってきたときに、アメリカでどういう議論の展開があったかを伺いたいです。例えば、9.11 の議論の焼き直しがあっただけなのか、それとも、もう少し違う展開があったのか。アメリカの知識人の間の話となってしまうが、どういう風に見られたのか、変わらない状況という風に見たのか、それとも、少し違う目で見たのかを伺いたいです。

高橋：なかなか難しいことですが、9.11 以降色々な議論が成熟したかというと、それは私にはわかりません。むしろ、9.11 以降積み重ねられてきたものを基に、いわゆるイスラモフォビア、ムスリムに対する差別の構造理解がより進んでいきました。一方で、2016 年にトランプ政権となり、保守派が巻き返しを図っていましたが、そちら側もまた、ムスリムに対する攻撃をより組織化していました。つまり、両陣営、ムスリムを攻撃する側とムスリム側の対立構造が明確になっていった部分はあるとなんなく感じています。ただ、もう一つポイントになるのは、アメリカの中のリベラルな勢力とムスリムとの関係で、彼らの軋轢が実は結構問題視されています。ムスリムを応援するのはいわゆる民主党側、リベラルな人たちの側ですが、彼らとムスリムは必ずしも様々な価値を共有していないということが明確になっています。より具体的に話すと、私が調査している、ある白人の改宗ムスリム知識人でハムザ・ユースフという人がいますが、この人は保守派のムスリムの代表として人気があって、彼の思想履歴を見ると動きがわかりやすいです。彼は元々、9.11 まではアメリカ批判を唱え、アメリカの現状の問題を明らかにし、とても人気がありました。しかし、9.11 以降は、彼はブッシュ政権に協力する姿勢をとりました。つまり、アメリカのい

わばネオコン系と繋がっていき、移民のムスリムを批判する方向にシフトしていきました。ところがその後、2010年代以降ぐらいから、今度は移民系のムスリムの人々を評価し、よりを戻すというか、そちら側と組んでいきました。そういう歴史はかなり批判されていますが、こうした動きは一つの例と言えます。ただ、私には体験的に語れるような知識はないので、取り敢えずはこんな感じでご説明したいと思います。

質問者1：ありがとうございました。実は、ISISに対するオープンレターをご存知かと思うが、その中にハムザ・ユースフの名前があり驚きました。内容も結構保守的でした。

高橋：あれはスンナ派の保守派のウラマー系の人たちが出したもので、ハムザ・ユースフもそちら側の人ということになります。アラブや特にエジプトもそうですが、アリー・ゴマアといった人たちも含めて、権威主義的な政府とくっついている立場にあります。同じような構図が実はアメリカにもあって、ネオコンとスンナ派伝統ウラマー・スーアーの人たちが組むという構図が実はあります。最近ですと、ハムザ・ユースフらは UAE と強く結びついていますが、UAE はイスラエルとつながっていることになって・・・そういう政治的な話は映画の話からはだいぶ遠いですが・・・。

質問者1：ありがとうございました。

木原：次の質問者の方、お願ひいたします。

質問者2：質問ですが、先ほど、一夫多妻制の条件は第一夫人の共感を得なければいけないことであると言ったのは彼女自身のお考えだということを仰ったかと思うのですが、ムスリムの国々では一夫多妻制の条件を様々な婚姻法で定めており、シリアではどうなのかと。もしかしたらそういう条件があつてそういう言葉がでてきたのかなと。それと、もう一点ご質問させていただきたいのは、同性婚のことについて、カナダにいるシャジド・マンジさんとかがいますけれども、イスラームの中でもどんどん変化があるということを、こういう映画はどういう思いで作られたのかということをちょっともっと・・・と思うのですが、あまり進歩的な考えには批判的なのかなと。少し、映画の製作者についてお話しitただければと思います。

高橋：妻の同意がというのは、私が念頭に置いていたのは、古典イスラーム法で、私もいわゆるイスラーム法の専門ではないですが、例えば近現代のエジプトの流れをみると、基本的に古典イスラーム法といったものの中にはそういう条件はなかったかと思います。しかし、確かに、シリアで現代に適用されているものだとそういうルールがあるのかもしれません、それについて私は確認しておりません。もしかすると、Rudayna さんはそういう理解を基にしている可能性はあるかもしれません。ですので、私の捉え方はもしかしたらそこら辺を事前に押さえる必要があったかもしれません。

それから、監督はそもそもどういうスタンスなのかについてですが、実はこの映画には背景を説明した資料が付いていて、そこに映画を観るために必要な知識としてのイスラームやシリアの内戦の話が書いてあります。そういうものを読む限りでは、例えば基本的に Dalya やその家族はスンナ派の伝統的な考え方の人たちなのですといった説明のされ方や、スンナ派の伝統的な教えなどの、いわゆるよくある一般的

な概説書的な話が書いてあるにとどまっています。ですから、監督の方のイスラームに関する理解は、現状の色々な変化を踏まえているかどうかについては疑問に思うところはあります。監督はそうしたもの全然意図していない可能性があります。監督は、元々今回のような映画を撮ろうと思って撮ったというよりは、知り合った一家の人たちとコミュニケーションをしていて、最初は恐らくもっとシリアの内戦との絡みというところでいこうとしていたところに、もっと深く付き合ってみると色々な家庭の問題といったものがでてきたという、そういう形でどうも作られたと思われます。本当は監督を呼んで開催したほうがよかったですかもしれませんが、そういった流れがあります。そういう意味で、この人たちが語った内容を、特に位置付けることなく恐らく表現しているのかなと思います。ただ、こうした発言をする人は、この家族の人たちみたいに多様ですが、色々なことを言う人たちは、アメリカには結構います。こうした人たちがどういう背景でそれを言っているのかはそれぞれです。たしか、Dalya は同性婚に賛成だと言っていました。ただ、どれだけ彼女が背景をわかって言っているかはよくわからないところがあります。だから、この映画の中だけで、この人たちの立場を、現在議論が進んでいる同性婚の問題などと位置付けることは難しいと思います。私はむしろ、こうしたものでは恐らくなく、それぞれの家族の中ででてきた発言として解釈をした次第であります。

質問者2：こういう映画を観て、ステレオタイプなイスラームの教義をある意味繰り返すようなところがあり、これを観て、イスラームってこうだと思ってしまう人がでてしまうのがちょっと残念かなと思った次第です。ただ、一般的な考え方なのかなと思いながら観ていました。ありがとうございます。

木原：次の質問者さん、お願いします。

質問者3：映画を観ていて、Dalya はカトリックの学校に行っているんだとか思ったり、ドイツとかオランダに移り住んだ私の友人も特に女の子はみんなカトリックとか、カトリックがなくてもプロテスタントの学校にわざわざ送っているということで、話を聞いたら、移民ムスリムは殆どそうしているのではないかという話も聞いていたので、勝手にやはり Dalya もそうなのかと思っていましたが、いや、ここはアメリカのできちんと聞かないと思いました。こういう、ムスリムとしてアメリカに移民で行かれたような、中東とかに出自をもつ方たちがクリスチャン系の学校に通うというのがどれくらいメジャーな選択なのか、また、その裏にある思いを聞かせていただければと思います。

高橋：私もちゃんと調査したとか、データで答えられるわけではないのですが、私の現地での印象として、たしかにこれはわかる気がきます。例えば、女子高というのは一つのポイントになると思います。異性の目に触れさせず、女性だけでやっている学校というのは一つの魅力に映ります。あと、勿論お金の問題があって、お金がないとミッション系の私立には入れられないで、恐らくお金が無い人は普通の学校に行かせているというのあります。ですので、多くの人が公立の学校に行っていると思いますが、お金がある人ができる選択として、まず女子高というのが一つあって、それが宗教系、キリスト教系が経営しているところが結構あります。それから、私が最近思っていたのは、例えばムスリムで非常に宗教に熱心な人にとって、何がやはり脅威なのかと言うと、それは他の宗教、例えばキリスト教が脅威なのではなくて、世俗社会の方が脅威であるのかなと。そうすると、キリスト教に熱心な人とある意味話が通じるわけです。世俗的なもの

は怖いねと。むしろ、教育をさせるのであれば、イスラームの学校がない場合、世俗の学校ではなく、宗教の学校の方が良いし、その方が危険は少ないと判断するはあるかと。

それと、先ほどのハムザ・ユースフについてですが、スンナ派のウラマーで、実は、彼はトランプ政権の時代に政府が作った平和活動委員会に入り、それがすごく問題になりました。実は、そこは、カトリックの司祭といった宗教系の保守の人たちが中心となって作っているところで、ハムザ・ユースフはその人たちとも良い関係を作り、そのメンバーとして入ったという経緯があります。ですので、宗教保守系の人たちとムスリムでも保守の人は相性が良い部分があります。そうした意味で、宗教系のどこに入れるという背景はあるかなと。ただ、これはあくまで印象で、データとして何か出しているというわけではないのですが、そういうものはあるかと思います。

木原：ありがとうございます。次の質問者さんお願いします。

質問者4： Dalya の両親が、かつて 20 年前にアメリカにいて、市民権も持っているということでしたが、どういう経緯で彼らはアメリカへ来て市民権を得たのかが気になったので、もしお分かりであれば教えていただきたいです。また、Dalya の一家はミドルクラスのムスリムということが映画を観てわかったのですが、米国のムスリムの中でこういった人たちはどれくらいの割合なのか。彼らはごく少数派なのか。それとも結構こういった方々がいるのか。フランスの場合だと、植民地支配と、労働移民として入ってきた人たちが多数派を占めていることから、階層面ではミドルクラスはいますが全体的に低所得層が多いとか、大学進学者の割合が全国平均に比べて低いことがあるのですが、アメリカのムスリムの階層についてもしご存知であれば教えていただきたいと思いました。

高橋：市民権について、私はアメリカの法律には詳しくはないですが、普通に仕事などでアメリカへ来て、最初は労働ビザで入って、長期でいると永住権が取れて、さらに市民権も取るというプロセスは、どの何人であっても合法的な手段できた人はとれます。特にムスリムだからというのではなく、ですから、父親は恐らく会社経営者で、何らかのアメリカとの取引で恐らくアメリカへ来たか、それか、普通に学生としてアメリカへ来て、それから普通にアメリカの会社に就職して、しばらくすると永住権が普通に取れるので、それを取って、市民になりたかったらまた応募すると。基本的には、それがリジェクトされるというのはあまりないでしょう。まあ、トランプ大統領がそういうことを特定の国の人に対してさせないという方向に持っていましたけれども、基本的にはそういうことができる国です。それと、アメリカに生まれたら基本的にアメリカ市民になれるので、Mustafa は確実にそうです。Dalya は違うかと思いますが、何らかの形で恐らく。そこに、ムスリムだからダメというのではなくてないと思います。

それから、ミドルクラスについてはデータがかなりあり、大事なポイントです。ヨーロッパとアメリカのムスリムの決定的な違いはここにあると思います。つまり、ヨーロッパは、まさに低所得で、郊外のスラムとか、home-grown テロリストといった話によくいきますけれども、アメリカは実は全く違っていて、ミドルクラスがかなり多いです。例えば、Pew Research Center などが行っている調査では、そういうことをまさにデータとしても出しておらず、もちろん多数派と言うわけではないが、割合としては相当多いです。これは、アメリカにやって来た移民の流れとして、高学歴の人、例えば留学生とかでアメリカの大学に留学とか、あるいは、プロフェッショナルとしてアメリカに来るとか。最近ですとシリコンバレーとかテック系で

インドやパキスタンから来ます。とにかく、そういう人たちが非常に多く、ミドルクラスは多数派というか、主流です。その人たちは、9.11 が起こるまではさほど問題なく暮らしていました。そういった意味で、周縁化はされていませんが、実はアメリカには周縁化されたムスリムがいまして、それが黒人です。黒人の改宗者はまさにヨーロッパでいう低所得の人々にあたります。ただ、黒人の人たちはアメリカ人で、最初からアメリカで生まれて、イスラームに改宗しています。

質問者4：ムスリム移民の場合にはミドルクラスが多いのですね。

高橋：多いです。もちろん低所得や難民の人もいますが、高学歴・高収入が目立っています。しかし、黒人はそうではないです。ですから、ムスリムコミュニティーの中でものすごい格差があります。移民の人たちは、黒人の問題を無視してきましたが、9.11 以後、今度は移民の人たちを排除するという論理が強くなってきており、最近はだいぶ変わってきています。ですから、Dalya みたいなお金持ちの家族はよくいるという実感があります。もちろん、地域差があるとは思いますが。

木原：ありがとうございます。では、次の質問者さん。

質問者5：元々イスラーム教徒に関心がない人にとっても、親の離婚の問題であるとか、移民の統合の問題など、色々な侧面で楽しめ、共感できる映画だと思いながら拝見していました。アメリカの移民環境について、3点教えていただきたいです。

まず1点目は、Dalya と母親は、お兄さんがアメリカで勉強していたのでアメリカに移住したとの説明がありましたが、これはお兄さんが家族呼び寄せの権利を行使して移住したと言うことでしょうか。もしくは、Dalya も母親も昔結構住んでいたという話があったので、元々グリーンカードか市民権を持っていたということでしょうか。言ってみれば、家族呼び寄せは難民危機の際に難民が移住するための大きなツールとして使われていたので、それがアメリカでどの程度使われていたのかという質問です。この点を映画に絡めて教えていただければと思います。

2点目は、映画の最後の卒業式に Dalya の母親の Rudaya の姉妹が出てきましたが、彼女たちは父親みたいに式があるのでたまたま訪問で来ていたのか、それとも元々アメリカに住んでいたのかということです。映画の中で描かれていることに限界があるかと思うのですが、なぜこうしたご質問をするかと言うと、移民のパターンとして、親族が多い国に移動するというのがあるかと思います。ですので、母親にとっては、もし元々姉妹がアメリカに住んでいるのであれば、単に息子がいるということだけではなくて、姉妹がいるというのは大きなファクターとなってくるかと思うので、親族がいるという要素が働いているのか。それと、姉妹は普通家族呼び寄せでは呼び寄せられないかと思うのですが、アメリカではどうなのかを教えていただきたいです。

3点目は、映画ではあまり描かれていないのですが、シリア人の互助組織・同郷集団の様なものがアメリカにはないのかということです。アラブ人組織はあるということで、研究なんかもあるようですが、シリア人は新しく行った人もいれば、前から来ている Dalya の家族の様な人たちもいるかと思いますが、そういうものが統合や社会適応に影響を与えるかについて、映画ではあまり出てこなかったと思うのですが、ご存知のことがあれば教えていただけると嬉しいです。

高橋：なかなか全部を上手くお答えすることはできないかもしれません、恐らく、家族呼び寄せではなく、母親とお兄さんは元々市民権を持っていたのではないかと。呼び寄せてもらって、そこで市民権を得たという感じには受け取れませんでした。難民としてアメリカに渡ってきたわけではなく、元々アメリカの市民権を持っていて、シリアずっと暮らしていて、その後アメリカに来た方なのかなと、映画を観ていて思いました。家族呼び寄せを使ってアメリカにどれほどのムスリムが移住しているかについては、詳しくないので、データを用いてお答えすることはできません。

2番目に関してですが、この姉妹は映画の中で、皆で海岸でバーベキューをしているときにいたので、恐らくアメリカに住んでいると思われます。母親についてはわかりません。もしかしたら、母親はシリアから来たのかもしれません、姉妹に関して言えば、アメリカに恐らく暮らしている人々ですが、どういった形でアメリカに来たかについては、映画だけではわかりません。ただ、様々な繋がりを使ってアメリカへやって来て、その後永住権を得て、市民権を得るというプロセスを取るといったパターンなのかなと思います。全般的な移民の法律的なことは、私は詳しくないのですが、この姉妹については、近くに住んでいるかはわかりませんが、恐らくずっとアメリカに住んでいる人たちで、卒業式のためだけに来たわけではないかと思われます。それから、シリア人の互助組織がピンポイントであるか否かはわかりませんが、当然あるとは思います。アラブ組織もあるのですが、より小さな単位の他のエスニック集団に関する限り、こうした団体もあるので、こうしたシリア人組織があってもおかしくはないかと思います。映画では、こうしたものとの関わりというのは描かれていないので、例えば Dalya の一家がそういうものにどう関わっていったのかは、これだけだとわかりません。

質問者5：ありがとうございました。

木原：お次の質問者さん、お願ひします。

質問者6： Dalya の内心の話なので、想像でしか語れないものかもしれません、父親もそうですが、Dalya が数年過ごした後に、最終的にここに所属感・帰属感がないと映画の中で言っていたのが気になりました。鑑賞者から見ると、英語もアメリカの若者のような速さとノリとカリフォルニアの訛りで非常に流暢に話しており、若者の諍いはあるかもしれません、交流は上手くいっているにも拘らず、自分の生きる場所はここではないといったことが出てくるのは、その数年間に起きた、メディアや社会における反ムスリム感を彼女が感じ取っているのか。それとも、それと重なるかもしれないが、宗教的なものを個人として実践していることを何も阻害されるわけではないし、彼女の場合はヴェールも隠したくないし、隠さないといった感じですが、それでもやはり社会全体でもっと集団的なイスラームの実践といったところに魅力を感じ、そういうところに帰属したいと考えているのでしょうか。もし高橋先生ご意見があればお伺いできればと思います。

高橋：一言で申し上げると、私もわかりませんが、人が外国で生きていく上で、そこがどんなに良いところでも、帰りたいということはあると思います。父親がアメリカをとても嫌がっており、また彼女は父親が大好きであることから、そういうことをきっかけに、ここは自分の居場所ではないという感情が出てきます

し、うつうつとした様になるもの、アメリカがムスリムに対して差別的だとかということに関係なく、人として起こることかなと思います。私自身は、個人的・人間的感情の中で起きることであると捉えることも可能かと思います。勿論、そこにイスラモフォビアの高まりや社会全体で理解がないということを考えることもできるかと思いますが、この映画の Dalya の言葉だけでそうしたものが関わっているかを判断することは私にはできません。彼女はものすごく頑張って適応してきたわけで、彼女はその点を自分でも言っていますが、それを器用にできる人です。ただ、逆にそれを器用にできており、また明るくて元気はつらつとしていることによって、みえてこないものもあるかとは思います。これは私の偏見ですが、アメリカの映画はポジティブであることを表現として求められており、この映画も基本的にはそうです。しかし、もっと様々な葛藤があってもおかしくはないし、その一部が本作で垣間見えていると捉えても良いのかなと思います。

木原：ありがとうございます。では、最後に私から質問させていただければと思います。1つ目は、質問というよりコメントですが、Dalya が高校のダンスパーティーに行きたいと母親に言ったときに、母親は「男の子との接触を避けなければいけない」、「それはだめだ」、「それは私たちの文化ではない」、「慣れないことはしない方が良い」と母親が言っていました。その反面、母親の Rudaya は自分がアメリカで変わらなければ生きていけないからと言って、大学に通っていました。そこが、一瞬見た時に矛盾していると感じました。それは、私から矛盾するような気もしますが、母親の Rudaya から見るとそれは矛盾ではないのかなと思い、引っ掛けたのが1点目です。もう一つは、父親が二人目の奥さんをもらった時に、面白いことを言っていて、「私は創造主を満足させたいのであって、他の被創造物を満足させたいわけではないのです」といったことを言っていましたが、あれは、父親が、自分が二人目の奥さんをもらったことを正当化したいのか、あの言葉を言うことで何を言いたかったのかが私には理解できなかったので、その点をお伺いしたいと思います。

高橋：最初の問題について、確かにそうだと思います。結局、自分の文化を守らなければいけないと言っても、そういうわけにもいかないという現状があります。特に、母親の Rudaya は離婚して、自立していかなければならぬわけですが、アメリカで自立していくためには、学歴が必要です。でないと、まともな仕事に就けませんから。ですから、カレッジに行くわけです。あれは、Mustafa が勧めたと言っていましたけれども。それと、もちろん英語のコースもとっているので、英語力も高める必要があります。ですので、カレッジに行くという選択は非常に合理的だと思いますし、それをしないと、仕事もできないし、言葉も上手くならないという現状があるので、それはやらなければいけないことかと思います。本人はしぶしぶという雰囲気もありましたが、やっぱり頑張っていました。Dalya に関しても、だめだとは言ってはいますが、だんだん私が見ているとなし崩しっぽくになってきていて、例えば、ダンスパーティーは明らかに男性もいる会場で、女性しかいないというわけではないわけで、女性は外に出てはだめだとか、男の子とその後にどこかに行くということは避けようとしていましたけれども、ダンスパーティーに行かせた段階で、それはもう事実上認めたと言わざるをえません。彼女はカメラの前に向かって、「イスラームはこうなんだ」と言っていますけれども、現実には変わっている部分はやはり大きいにあるかと思います。それを言説としてどう正当化していくかというのはまたこれからで、そこでまた解釈が変わっていく可能性はあるわけです。「ここまで良い」というのがどんどん変わっていくという。私はむしろそういったところに人間として

の面白さを感じました。イスラームのルールはこうだから絶対こうだという話ではなく、まさに経験の中で変わっていくことを私は感じました。

余談ですが、実は私の両親もロサンゼルスへ私が大学生の時に行き、母親は専業主婦でしたが、やはりカレッジに行っていました。やはり、そういう形でアメリカに馴染んでいく一つのツールであり、その後も、ある程度収入や学歴がある人にとってのツールだったのかと思いました。ですから、映画を観て、そうか、母親がカレッジに行ったのはアメリカに馴染むためだったのかと今頃になって気づいたところもありました。

それから、2番目の父親の発言については、実は私も結構注目していました、色々な形で捉えられるかと思いますが、単純に見ると、父親は悪いことをしたとは思っているかと思います。しかし、妻には謝らない。なぜなら、謝る相手は神だからということなのかなと思います。正当化したように見えますが。しかし一方で、あれはムスリムの一つの信仰の在り方なのかなと思います。神を満足させるために生きるのが人間であるというのはイスラームの教義的にはあります。ですから、極論すると、他の人間全員に嫌われても、神を満足させられればそれで良いぐらいの究極の信仰的な部分はあるかと思います。ですから、そういった意味で彼の発言は、イスラームの信仰的にはおかしなことは言っていないかと私は思います。あくまでも、神を満足させたいと。父親があの文脈でそれを言うのは、悪いことをしたけれども、奥さんにそれを謝って修復を図るつもりはないぞということなのかなと。これは主観ですけれども。ですから、あの発言は、簡単に言ってしまえば、正当化するための発言に私には聞こえますが、信仰的にみれば、別におかしい発言ではないかと思います。

発言者1：一言宜しいですか。あれは、不実な関係を女性と続けるよりは、きちんと離婚することを選ぶという信仰としての仁義の果たし方だと私は納得しました。それと、先ほど別の質問者が仰っていた、例えば妻に知らせなければいけないというのは、エジプトの場合は2001年の法律で変わりました。ある意味、フェミニズム運動の中の一つの大きな勝利として、第一夫人の許可を得なければ複婚ができないという権利を女性たちが勝ち取ったというふうに語られるという意味では、世俗的な運動と言えなくもなく、国家法の家族法の改変で行われた規定なので、もちろんシリアの内戦とか様々なことがあり、恐らく裁判所からは何かの手続きがいったのに、奥さんのもとには渡らなかったか、あるいは夫が抹消したか、それはわかりませんが、いずれにしてもそれは世俗的な話であって、宗教的な信仰の面で言えば、神に従って、女性と特殊な関係を結びたい、性的な関係に入りていきたい場合には結婚するということが、自分としては仁義を切ったつもりであったが、逆にそれが問題化されて、妻が離婚すると。彼を擁護したいという気持ちは全くないのですが、これは結構一般的な言説かとは思います。だからと言って、それをみんながしているわけではなく、だいたいそれを言うのは複婚をしている本人であり、周りの複婚をしていない人々は、保守派の人でも、彼は何を言っているのかと。どこかの文化に入れれば、みんなそう思っているとか、そういう様な話ではないということは、付け加えておきたいと思います。

高橋：ありがとうございます。

発言者2：入っても宜しいですか。私は最近、アメリカの英語の文献を中心に、イスラーム教徒の人たちがイスラームをどう理解するかに関して読んでいるのですが、高橋さんが先ほど、教義上は神を満足させる

ことが絶対であって、その被造物を満足させることではないというのはおかしくないと仰ったことは、確かにおかしくはないとは思うのですが、神の被造物に良くしないで、神を満足させることはできないではと思います。つまり、人々に公正にできないことを神が喜ぶはずがないという考え方があると思うので、神対人間という一対一の関係というよりも、よりソーシャルな部分も恐らく実際の人生では、まさに高橋さんが仰った通り、経験の部分ではあるかと思いました。

高橋：ありがとうございます。私も伝統的ムスリムというようなことを言いましたが、本当にそうだと思います。今の木原さんのご質問は、2つ絡んでいると思います。口で言うのと、実際に何をしているかの差は結構あるかなと思います。父親も母親の Rudayna さんも、二人ともカメラの前で、ムスリムでない監督に向かって、イスラームはこうなんですと言っているわけです。ですから、そこでの齟齬もあるかと思います。実際には、勿論それでは済まないかなと思いましたし、父親の様な考え方をみんなが普通に行っているというのは、確かに誤解を与えるような言い方だったかもしれません。

木原さん：ご質問できて良かったです。ありがとうございました。

\* \* \* \* \*

木原：最後に本日の閉会の言葉を森千香子さんよりいただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

森：高橋さん、本日は改めまして、素晴らしい作品を、字幕を付けて、また本日ために監督と交渉されて上映権を買われたということですね。

高橋：実は、きちんとお金を支払えば、こうしたドキュメンタリー映画の配給を認めてくれるという業者がございます。なお、監督もその業者を通して招待できるそうですが、それもお金がかかってしまいます。

森：非常に教育効果が高い作品だと思いますし、せっかく字幕付きですので、ぜひまた広く上映会を何度かできれば良いなと思わせてくれる作品でした。ありがとうございます。本日の映画を拝見していて考えたのは、今アメリカでムスリムコミュニティー、もともとは黒人のブラック・ムスリムが主流であった国で、今こうした移民のムスリムが増えていることです。また、作品を観ながら最初に考えたのは、2018年に二人の女性のムスリムが米国連邦議会選挙で議員になりましたよね。一人が確かパレスチナ系の人で、もう一人が・・・。

高橋：ソマリア系ですよね。イルハン・オマルさん。

森：そうです。去年の大統領選挙と同時期に実施された州議会選挙でも、8名ほどのムスリム議員が、しかも全員20代くらいの若い方々が当選するということがあります。急速に移民筋のムスリム・アメリカ人の政治的プレゼンスが、私の印象論的な部分もありますが、高まっていると言えます。こうしたことが、トランプ政権下におけるムスリムバッシングと同時並行で起きているということは知識としてあったのですが、そ

うした流れを草の根で支えるこうした若いムスリムの子たちが学校に通って、先ほどデモに参加したシンが印象的だったと申し上げましたけれども、声を上げるようになってきています。現在、アメリカ社会が変わりつつある中で、現場で起きていることを、日常を通して見せてくれるような素晴らしい作品でした。ありがとうございます。

今は巣ごもりせざるを得ない状況で、対面で上映会を行ってしまうと、交通状況などの様々な事由で参加できない方もいらっしゃるかと思いますが、オンラインだからこそ、気軽に集まりやすいかと思います。新型コロナウイルスの関係で大変な日々が続いておりますが、今後もオンライン上映会の様な場を細々と続けていければと思いました。本日は、高橋さん、そして素晴らしい司会をしてくださった木原さん、最後の質問も堂々たるもので素晴らしいかったです、本当にありがとうございました。

木原：それでは、本日はこちらで閉会とさせていただきます。ご参加いただきどうもありがとうございました。

\* \* \* \* \*